

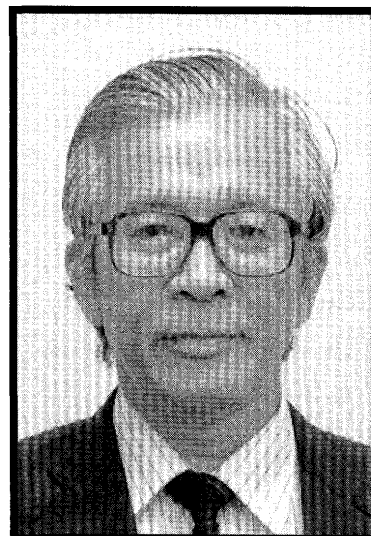
国内の動き

国際会員

田村 武先生のご逝去を悼む

田村 武先生におかれましては、病氣療養中のところ、去る平成22年6月30日ご逝去されました。61歳10ヶ月のご生涯でした。

田村 武先生は、昭和42年京都府立朱雀高等学校を卒業され、京都大学工学部土木工学科に入学、昭和46年同ご卒業後、引き続き大学院修士課程へ進まれ、昭和48年赤井先生の路盤基礎工学研究室へ助手として着任され、土質力学の研究に着手されました。その後、講師、助教授を経て、平成8年京都大学工学研究科の教授に昇任され社会基盤工学専攻応用力学講座を担当してこられました。私は1年後輩であり、同じ赤井研究室に学生として配属されたことが先生と接する端緒でした。先生は研究教育とともに、留学生センター長、国際交流センター長として、京都大学の国際交流に多大な貢献をされるとともに、京都大学理事補を務め、学内行政にも貢献されてこられました。



着任後研究室で紹介された先生の修士論文は格子構造の力学特性に関するもので、古典的な構造力学とはやや異なった応用力学的な研究だと感じたことが思い出されます。その後、先生は当時未完成であった圧密問題の理論的研究や数値解析的な研究を行われ、多大な成果を上げられました。圧密を数値解析で解く場合の空隙水の挙動を差分法で解く方法は、赤井-田村の方法と呼ばれております。

平成の初期は、地盤工学会では、地盤材料の破壊の前兆としてのせん断帯の形成などを対象にした地盤の破壊と変形の局所化の研究が活発になった頃で、田村先生は剛塑性有限要素法の立場から活発な研究をされ、平成6年の地盤の破壊とひずみの局所化に関する委員会報告にもその成果が示されております。さらに先生は一貫して、数理的な立場に立ち力学現象の解明に関わってこられ、多くの成果を上げてこられました。粒状体の力学に対しても数理的な観点からの研究を進められるとともに、コインによる実験なども行って本質的現象の大切さを示されました。

地盤工学会では、地盤工学における物理数学の応用に関する研究委員会委員長を1997年～1999年の3年間、務められました。先生の研究の成果は、3編の単著、120編を超える論文として発表しておられます。特に教科書として、線形代数（共立出版、1994）を出版されたことは先生の数学教育への情熱が感じられます。また、「地盤工学会論文報告集」編集委員会委員を1986年～1990年の5年間お務めになり、学会の発展につくされております。

一方、先生は実務的な土構造物を含む土木構造物の問題に関して、応用力学の立場から地盤工学分野および構造力学分野の実問題でも先導的な役割を果たされ、青函トンネル、東北新幹線、大阪市や京都市の地下鉄建設などの実務分野でも指導的な立場で幅広く関わってこられました。

先生は、研究の目標を「複雑な現象を単純なモデルで説明すること」とされ、「長い年月を経て得られたノウハウも数学モデルを用いて説明できれば、それは一つの科学である。科学とは単純化に成功したモデルの集積である。工学と科学の間に壁を置いてはならない」ことを唱導しておられました。

研究と教育において、常に明晰性をもって基本原理にかえる態度を一生涯つらぬかれた田村武先生のご他界にあたり、ご功績とお人柄を偲ぶとともに、ご生前のご指導に感謝の意を表し、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（岡 二三生 京都大学大学院工学研究科 教授）
社団法人 地盤工学会